

アトモスフィア

生化学者の社会的責任と説明責任
(アカウンタビリティ)

大島 美恵子*

21世紀, 科学技術は人々の生活に不可欠な基盤となり, 好むと好まざるとにかかわらず科学技術抜きに文明は存在し得ない時代になった. 特に生命科学領域では, 学問の進歩と同時にその技術応用が進められる時代を迎えた.

研究に夢とロマンを求めて実験計画を組み, 新発見を得る事が私の最大の喜びであった基礎医学研究者としての30年間, その一方で研究とは何かについて考え続けてきた. 喜びであったはずの発見で病因が判明したものの, 治療は不可能で研究が患者の幸せに繋がらないばかりでなく, その逆の場合もあるという矛盾に悩んだ. また, 生後数週間で診断がついたGangliosidosisの子供の両親に, あと1年半の予後について説明した時, 両親から病因をつきとめた事を深く感謝されながらも無力感に襲われたことを想い出す. これらの経験の中で, 診断技術が急速に発展して治療法が日ごとに進化しつつある現在, 治療を受ける患者側の理解にも社会一般の人々の認識にも限界があり, 治療を行う医者自身の知識にも限界があるならば, これをよく理解している科学者・研究者が持てる知識の範囲内で治療の限界や危険性について誠実に説明し, 自分が行った診断の責任を担うべきであるという考えに至ったのであった. これが科学者の社会的責任である.

実験科学者としての定年を迎えてから, この疑問に答えるために学際領域の研究に踏み出し, 今「生命公益学」という視点に立って生命科学を考えている. 生命倫理, 環境倫理, 企業倫理という言葉が一般化する中で, 倫理という言葉では説明できない複雑な社会問題が数多く派生していることを学び, common good (共通善: 公益)という総合的な視点で社会を俯瞰する必要性を痛感した. そこにあるのは絶対的な唯一の解ではなく, 幾つもある中からその時代の社会的文化的背景に応じて最良の解を選択するしかないという世界である.

他人より先んずることが求められる生化学研究は, 集団としての独立性が極めて高く, 仲間内の評価が社会の評価といった論理が通用する世界である. 研究者仲間では評価される論文が書ければよい, 良い論文さえ書けば社会に対して無関心でも許されると考える生化学者は多く, また論文以外の事を考えるのは研究者として邪道であると思っている人もある.

しかし, 学問の進歩と同時にその技術的応用が進められる現代の生命科学では, 仲間内だけで通用する常識が一般社会における常識から大きく隔たっている場合がよくある. そういう場合には, 科学者が社会に対して何を指し何を實現しようとしているのかをよく説明し理解してもらう必要がある. そして社会一般の人々との対話を試みることに, 専門家でなくても理解できるようにやさしいことばで説明することが必要である. これが説明責任である.

EGFRを分子標的とする肺がん薬(イレッサ)の副作用は, 情報公開の不足と担当医の知識不足がもたらした悲劇であるが, 上皮成長因子受容体の基礎研究にかかわった生化学者と無縁ではあり得ない. 使用する臨床医がその薬剤の標的を理解していないとすれば, これを黙って見ていた研究者にもその責任の一端がある. 江上不二夫先生の言葉に, 「誰にも見えない(研究の)山は急いで登りたい, 誰にでも見える山は楽しみながらゆっくり登りたい, 路傍に咲く美しい花に気付くから」という言葉があるが, 山に登りながらも時々立ち止まって, 路傍の花だけではなく周囲(社会)をよく見回してみる姿勢も大事であろう.

これからの科学者・研究者は, 社会の求めに応じて情報を公開した上で, 時には社会の声に耳を傾けながら自身の研究のあり方を考えてゆくことが必要である. 21世紀の生命科学が健全な発達を遂げるためには, 社会と誠実に対話し交流してゆくことが重要であると思う.

*東北公益文科大学副学長